



の職員室には、岡崎英彦初代施設長が、実践に悩んでいる職員に投げかけられていた「本人さんはどう思てはるんやろ」という言葉が掲げられているそうです。「本人さん」の視点に立つて考へること、それが発達をとらえることの意味ではないでしょうか。そして、そして「本人さん」の目線で考えていくと、本当のねがいを一緒に実現していくこと、それが発達保障の出発点ではあります。その本当のねがいを一緒に実現していくこと、それが発達保障とは、決して、特別な基準で子どもやなまを見ることでもなければ、特別な手法で子どもやなま

かまに接することでもないのです。

一方で、院生の言葉には、こうした「ふつうこと」がふつうでない、「あたりまえのこと」があたりまえでない施設や学校の現状があるのではないかと思うのです。

障害があつても、まずは「一人の子ども」であるはずなのに、障害からくる特徴だけで語られ実践がなされてしまう、特別な手法をたくさん知っていることが専門性にすりかわってしまう…そんな状況が起きていないでしょうか。さらには、誰もが、人とのかかわりのなかで安心を得、心が満ちたときに新しい世界や新しい自分に挑戦していくのに、その基本的な安心感すら保障されない職員不足、教員不足はますます深刻になっています。

糸賀一雄さんは、54歳で亡くなる直前の最後の講義（1968年、滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会）で、「精神薄弱児」というのは、価値的にはゼロであるという見方でしか見えないような大人の人たちがたくさん世の中にはいる」し、そういうかたくなでカサカサした見方が施設職員にも影響を与えていたけれども、かたくなでカサカサした見方から「解放される」ということが大切であり、そのための「自分自身との対決」が、専門職の「大きな魅力になつてこなければウソなんですね」「この子らを世の光に」と語り続けながら倒れ、還らぬ人となりました。



### 「ふつうこと」「あたりまえ」の難しさ

かまに接することでもないのです。

# 成人期のなかまたちが教えてくれること

この数年、大学院には、成人期にある障害のある人の発達や支援に関心をもつてやつてくる方が毎年います。先日、修士論文を書きあげた元学校教員の院生が、「ほんまのところ、発達って難しい、発達保障って大事やと思うけど敷居が高かつた」と率直に話してくれました。彼女は、ある就労継続支援B型事業所で、青年たちと喜怒哀楽とともにしながら仕事や学習に取り組んでいます。そして、「けど、修論を書いて、発達保障ってふつうこと、あたりまえのことなんやつて気づいて、ますますおもしろくなりました」と。

「難しい」「敷居が高い」と思わずてしまつているのは、一つには、発達や発達保障を語る私たちの側の課題があると思います。そもそも、発達をとらえるとは、目の前の子どもやなまが何に心を動かし、何を喜び、何に怒りやせつなさを感じているのか、そこに心をよせていくことだと考えます。びわこ学園

度)、「しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って」(2006年度)について、3回目の連載をさせていただきます。今回は、成人期を通して、幼児期や学齢期に携わる方々とも一緒に考えていくような内容をと考へています。1年間、どうぞお付き合いください。

まずは、発達とは何か、発達保障とは何かについて考えてみたいと思います。

### 発達は難しい?



## 第1回 発達保障とは？

しらいし えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』(共著) (いずれも全障研出版部)『人間発達研究の創出と展開—田中昌人・田中杉恵の仕事を通じて歴史をつなぐ—』(共著) 群青社など多数。